

随想

バブル崩壊に思う

内需産業である採卵産業は明るい

加藤 宏光

リーマン・ブラザーズの破綻に続く、世界経済の鳴動は、我が国で経験したバブル崩壊を思わせる。今から遡ること一七年前、当時高騰する不動産価格は、一般的なサラリーマンの所得では到底手の届くレベルではなくなっていた。五〇年ローン、二世代ローンという言葉が定着し、『住居を手に入れるのに、一代では難しくなってしまった』と感じたのは、著者のみではない。

バブル経済が崩壊すると同時に、ドルが八〇円近くまで下降するという未曾有な円高が輸出産業を直撃し、右も左も真っ暗闇の印象が忘れられ

ない。

当時の銀行はまだ護送船団方式が当然と考えていた。著者が面談した銀行員に

『これからは、銀行が潰れる』『不動産に過剰投資しているダイエーが経営破綻する』

と話しても、他人事のように一笑に付されるのみであった。

一方、採卵産業に関わる人に対しては、それが内需産業であることや円高のメリットが一〇〇%享受できること等を考えると、ある意味で前途は明るいと言っていた。

本来、原始的な産業で行われる物々交換では相互に納得できる価値でやり取りするの

で、真の等価交換が成立する。

生産が消費を大きく上回るようになると、流通が必要とされ、交換の利便性のため、貨幣制度が確立される。貨幣の価値を担保するために自然発生的に金との交換が保証された(兌換制度)。

歴史的に世界の兌換制度が廃止されたのは、一九七一年(昭和四十六年)八月、当時アメリカ大統領であったニクソンが断行した金・ドル交換停止であった(ニクソン・ショック)。それまたはドル・ショック)。それまでは、世界経済にとっての機軸通貨であるドルが金とリンクしていたため、曲がり

なりにも、兌換制度が維持されていた。

しかし、パックス・アメリカナのもとでヘゲモニーを維持するアメリカドルは機軸通貨としての地位を維持し、それゆえに、架空の価値への投資がモノ(オイル・穀物等)を介して、バブルを招いた。

こうした流れを俯瞰すると、ノーベル経済学賞をニューエコノミー理論確立に業績があったとして、アメリカ人に与えられたことに、時代の皮相を感じる(注)。

虚業である「マネーハンドリング」が行き詰まった結果、实体经济への影響が開始め、

対応に追われる政府の姿勢を見るにつけ、金というモノに裏付けられない分膨脹した見せかけの価値は、収縮するとき、実体経済のバランスするところまで収縮するのは当然である。

では、実体経済にとつての適正価格は、どう考えればよいのだろうか。

過去、二年あまり、代替エネルギーとしてのエチルアルコールの需要が高まり(アメリカの政策に依存するところが大ではあるが...) コーン価格が高騰していた。合わせて、イラク戦争以来、原油価格が暴騰したこともあって、採卵生産者の間には

『今後は卵価とコストがバランスしないであろう。(自分は) 経営存続が不可能となる。経営に自信をなくした』

と打ち明けられる方も少なくなかった。

著者は次のように答えた。『中・長期的に考えれば、再生産の不可能な生産業はない。

まして、タマゴは内需産業であり、コストにプライスが追いつくのに、半年(最悪一年)かかることは有り得るが、必ずバランスする。業界内での体力競争ととらえる方が適正な判断であろう。また、代替エネルギーとしてのエタノールについても、今のアメリカ政策では、すぐに限界がくる。稲わらのようなセルロースを分解する技術が急がれる。むしろ、そうした技術こそ日本で開発されるだろう。そのためには、原油価格はあまり早く下がらない方が、技術開発に拍車がかかる。そうでなくとも、原油価格の高止まりは一時的なはずだ。井戸元コストは一二〜三割というから:』と。

九月にリーマン・ブラザーズが破綻して以来、原油価格は下がり続け、先週にはパレル当たり七〇ドルを下まわった。

まさに、実体経済の価格にもどおり、昨週にはピーク価格の半分以下のパレル当たり六

九ドルを下まわった。また、暴騰を続けたコーン価格の来年予想は、ブッシュェル当たり5ドル未満となり、燃料としてはアルコールが必ずしもエコロジカルと言えないことにも、焦点が当てられ始めてきた。

これらの条件を昨年以前に予想できず、本年の餌付けを取りやめたり、早期淘汰した向きもあるように聞く。先にも述べたように、基本的に内需産業である採卵産業では、コストに見合う価格は必ず追いかけて来てくれる。問題は、生産者がそれを待ち切れるか否かである。

バブルに浮かれた、マネーゲーム産業で過当に吊り上げられたモノの価格は、実態産業下では、必ずバランスする。それを待てるかどうかでプロとして生きる能力を試されているのかも知れない。

注:ハイエクからマルコヴィッツ、ブラック、マルコヴィッツは一九五二年に研究発表

(ジャーナル・オブ・ファイナンスに寄稿)。この成果で一九〇年にノーベル経済学賞を受賞。

次いでウィリアム・シャープ、一九六〇年CAPMA「資産価格評価モデル」を構想。これはマルコヴィッツ理論を発展させたもの。(著者の私見では、ある意味でこの理論と思想がバブルのもととなった)。一九九〇年ノーベル経済学賞を受賞した。
(二〇〇八年十一月六日)